○タマザキクサフジ（新稱）（久内清孝） Kiyotaka HISAUCHI: *Coronilla varia* is cultivated in Tokyo.

Coronilla 屬の植物は地中海岸及び其近隣のもので，そのうち日本に來た記錄のあるものは2種類で，それらは松村博士が植物學雜誌 16 卷 p.68–9 (1902) に報告された *C. glauca* L. と *C. scorpioides* Koch とである。松村博士はこれらに，それぞれ，ワウゴンハギ，ツリシヤクジヨウの和名を與えられた。そののち齊田功太郎，佐藤禮介兩氏は内外植物誌 (1917) に前者を圖說しているが，果して今尙殘存するかどうか不明である。しかるに最近笠原基知治氏は紫色の一種を見つけられた。これは *C. varia* L. で前2者とは別ものであつて花瓣は紫色である。形はツルフジバカマに似ているが，花序が繖頭狀につき有梗である。和名はないそうだからタマザキクサフジとする。Willis によれば萼の外側に蜜を分泌する性質がこの仲間にある由。

Coronilla glauca & *C. scorpioides* were recorded by J. Matsumura in the Tokyo Botanical Magazine Vol. XVI (1902). Recently *C. varia* L. has been found cultivated in Tokyo.

○リユウビンタイの名と觀音座蓮（前川文夫） Fumio MAEKAWA: Meaning of Japanese & Chinese names of *Angiopteris*.

もとはよく觀音座蓮と書いてリユウビンタイとよませた。植物名實圖考202によると記事は黑毛があつたりしてどうも少し別物らしいが圖はまず本屬である。そして蓮瓣が層々重なり集つているからの名であるとしている。觀音は要するに佛様位の意味であろう。これは葉柄基部に肉質の托葉が著きしかも葉柄が脫落後もよく殘つて重なり合つていることを佛像の蓮瓣にたとえたのである。牧野植物圖鑑によると和名も亦同じくこの托葉の集塊を目して龍鱗（リウリン）にたとえたのが訛つてリウビンとなつた，但しタイは語意不明とする。しかし私は龍鬢帶であると見る。龍鬢筵（リユウビンムシロ）とは龍鬢即ちコヒゲで織つた筵で，古く內藏寮式に諸國供進の中に武藏國から三十枚を出しているが，後には普通の疊表を琉球というのに對して上物をリユウビンという様になつた。材料の丈が短かいので中央に織りつぎがたての線になつているし又織目が細かい。ところでリユウビンタイの小葉は鮮綠色で濶大，左右の細脈は殆んど主脈から開出し等間隔で平行し，しかも必らず二叉分枝をするのでその間に挾つた葉肉は恰も疊の織目の様に尖つている。まして葉緣に褐色に囊堆が並んだ時には茶色の緣を付けた様であることが上等のリユウビンを連想せしめる諸條件として他に比するものがない。小葉は充分に細長くて帶をなす。リユウビンタイの名はこうして付いたと考えるのである。